

IT'S A SNOW WORLD ~白銀の世界に包まれて~

61 回生蔵王スキー修学旅行

1月27日から31日まで、宮城県並びに山形県で行われた修学旅行。今号では両面を通じて東日本大震災の被災地で行われた震災学習やスキー実習、体験学習の様子を2年新聞委員がレポートする。

#蔵王 #スキー #修学旅行 #初心者頑張りました #成長記録 #インストラクターさんに取材 #石巻 #東日本大震災 #被災地訪問 #フィールドワーク



題字 井口 文章
再刊 第472号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2025

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：蔵王スキー修学旅行に行ってきました！
震災学習、門脇小学校編、
二面：最終日の体験学習をピックアップ
蔵王修学旅行を支え続ける方々を取材



吹雪の中でも元気にスキー！
蔵王名物「樹氷」の前で樹氷ポーズ☆(Z7班)

初心者コース

「坂で止まらない」「カーブで滑りにくい」「リフトで失敗して玉突き寸前」：T4班は、転倒だらけの初日から始まった。初めてリフトに乗りアストリアゲレンデを滑った午後、急な斜面に班員は絶叫の嵐。転んだときはお互いに手を差し伸べて、何とか下まで辿り着くことができた。

2日目は、カーブを意識して滑

上級者コース

中級・上級者班であるZ7班。蔵王でのスキーが初めてという人が多かったこともあり、1日目は初級者コースで十分に足慣らしをしてから中級者向けのゲレンデへ。木々の間を縫って進むリフトからの銀世界に、何人も生徒から感嘆の息が漏れた。

だんだんと感覚を取り戻してきた2日目。度々インストラクターさんにアドバイスを受けながら、

着々とスキーの技術も上達していった。雪が降る中でも楽しそうに滑走する生徒に、インストラクターさんも「雪の日のスキーも悪くないでしょう」と嬉しそうな表情を浮かべた。

最終日の全山ツアーでは、はじめは苦戦していた新雪も楽しめるようになり、歓声を上げながら滑る生徒の姿も見られた。「まだ滑っていたかった」という声も聞こえてきた。経験者にとっても充実した3日間となった。

走した。横倉ゲレンデも滑り、直線で滑る際には少しずつスピードを出して楽しんだ。吹雪の中でも前を見てしっかりと下る感覚に、班員たちは大興奮。

最終日は、なんと中級者向けのコースも滑走！腰が引けていた初日は打って変わって、リフトを乗り継ぎ、コースをスイスイ進んだ。「まさか、ここまでできるようになるなんて」と、班員は成長に驚きと喜びでいっぱいだった。

インストラクターさん

三日間の錦城生の成長を見守ってくれたインストラクターさん。今回、T4 初心者班を指導してくださった平良木勝彦先生にお話を伺った。平良木先生は27歳からインストラクターを始め、錦城が初めて蔵王の修学旅行に来た時から欠かさず本校生徒にスキーを教えている。錦城生の印象について「他校では知らないふりをする生徒も多いですが、錦城はいい雰囲気です」と話す。錦城だけ「来た」と話すインストラクターさんが多いそう。

平良木先生は、最近では初心者コースを担当している。初心者班は、経験者班に比べて対面で指導する機会が多く、生徒の顔がたくさん見られることが魅力だという。指導の際には、できるだけ名前を呼べるようにフリガナを付けた紙を作るなど、生徒に寄り添う工夫をしている。

そんな平良木先生の指導方針は「絶対に泣かせないこと」と「落第者をださないこと」だ。せつかくの修学旅行だから楽しませては！

「下手でもいい！笑いながらするスキーは最高だと思えますね！」と平良木先生。錦城生に向けて「60周年と言わず、末永くスキーを続けてもらえたらいいなと思います」とメッセージを送ってく

スキーが好きになった3日間 初心者はどこまで上達できたのか！？



3日間で驚きの成長をみせた初心者班(T1班)

ドタバタと大慌ての一日目午前
人生初のスキー靴、期待を胸に出発！…と思われたのだが、まず歩くことすら苦戦しモチベーションが下がって…。皆の手を借りてなんとかゲレンデへ。片足スキーで歩く練習をした後、早くも両足スキーで緩やかな斜面を滑ってみることに。ほとんど傾斜もないためいけると思われたが…どんなに足を広げても止まらず他の班に突撃…。

割と慣れてきてリフトに乗って上から滑ることに。だが、私たちにまだ早かった…。順調だと思った八の字滑降も先生

が右に曲がると事態が一変。一人が曲がり切れずに転んで班員5人の玉突き事故に。そんな調子で滑っていき、どうやら所要15分のコースを1時間弱かけて、1日目午前の実習は幕を下ろした。

誰もが驚く速度で成長

1日目午後は先生の「スキーは転んでうまくなるんだ」という言葉を信じ、繰り返し転んで、起きてを繰り返していき、徐々に転回数が減って時間も短くなっていった。先生も驚きの成長だったらしく「明日はもう一本上のリフト乗っちゃおう！」と意気込んでいた。そして2日目。自信を持った我々標高1400mの樹氷エリアへ。が、猛烈な吹雪と視界不良に見舞われ、ゴーグルも曇って何も見えない！！わかるのは前に人がいることだけ。寒さと痛みを耐えながら、それでも技術を信じ、無事に下のゲレンデへ到達。下まで降りてくると初日に苦戦していたコースを難なく突破し、ゴールできた。自分に自信を持つことができた一日だった。そして最終日、中級～上級コースに挑戦し、転倒回数はわずか2回！先生も驚くほどの成長を遂げた。今回の3日間の実習を通じて、私たちはスキーへの自信を深めることができた。初心者で右も左も分からなかった私を一生懸命教えてくださったインストラクターさんに感謝したい。

一日目震災学習、門脇・石巻編



火災で焼け残った門脇小

被災した小学校を訪問 現地だからこそのわかること

初日に行われた震災学習の入り口のタブレットを使いながら、見学した。写真と比較していく中で、被災前は全く違う街並みだったことに驚くことが多かった。旧門脇小学校は、津波の被害よりも火災の被害が大きく、残された壁や天井に火災の猛威が残されていた。さらに石川さんが実際に避難した裏山の高台（伝承交流施設の旧門脇）で当時の様子や教訓を学ぶことができた。

一通りコースをめぐった後、石川さんに取材に応じていただいた。震災当時、石川さんは高台に避難し無事だったものの、飼っていた犬を亡くされた。2年前に語り部として活動を始めたが、それまでは震災のつらい思い出に背を向けてきたそう。だが時間がたつにつれ、自分が語り継いでいくんだという決心ができた。

普段の活動では、自分の言葉で「言葉に詰まったとしても、ありのままを伝えるようにしています」と話す石川さん。東日本大震災のことを「地獄」と振り返り、「地獄と言うと大げさに、嘘っぽく聞こえてしまうかもしれないですが、が実際に避難した裏山の高台と語る。それでも「この学びを絶対に無駄にはしません」と力を込め、錦城生に向けて「周りの人も守れるよう、命を大切に生きていってください」とメッセージをくれた。

石巻のまちづくり

△組は門脇小訪問後、石巻市のかわまち交流センターに到着し、石巻の街づくりの場を班別に訪れた。子どもたちの集う居場所づくりから始まった「こどもセンター」や、「株式会社口笛書店」とい

「石巻まちの本棚」は、元書店だった空き店舗を街の人の協力のもと改装したお店だ。温もりを感じる木の本棚には、新刊のほか、地元有志の人から届けられた古本がずらりと並んでいる。スタッフでイラストレーター福田美里さんは、「図書館とはまた違ったラインナップが魅力です」

震災から14年。焼け焦げたカーテンや粉々に砕けた窓ガラスの数々…。旧門脇小学校は今もなお、訪れた人に向けて凄惨な姿を伝え続けている。一方で、石巻の人々は震災から前を向いて新たなスタートを切っていた。

【震災学習は次号に続く】

と話す。お店に来るのは、近所のご年配や、絵本を見にくる親子連れが多い。ただ、若者が来ることは少ないそう。「自分じやどうしようもないことですが、少し寂しいです」とスタッフの吉田昌子さん。現在はみんなが来てくれるようなイベントを、少しずつ考えていると教えてくれた。

むらさき草

正月にテレビをつけて思い出したのは、一年前に発生した能登半島地震。親戚の家でテレビをつけた私の目に飛び込んできたのは、荒れ果てた家の前に立ち尽くす人の絶望した姿。痛ましい光景に、「自分に何かできることはないか」と探すが見つけられない。画面をただ茫然と眺めることしかできない自身のちっぽけさ、言葉で読んだ驚田清一さんの「わがらうとする姿勢」という文章を思い出した。「じぶんにはとても理解しがたいその思いを、否定するのではなくそれでも理解しようと思うこと、つまり、そのわからうとする姿勢こそ他者はときに応える」▼2018年放送の『三ツスベシヤル』誰にも言えなかつた震災の心の傷。母と子の対話。『は東日本大震災の被災者の思いと復興を迫った長期取材のドキュメンタリーだった。その中で、被災した少女が自身の体験を語る場面があった。震災で肉親をなくした彼女は、彼女と真摯に向き合う取材を通して、少しずつ自身の過去を受け入れ、ついに自身が7年間抱え込んでいたつらい気持ちを打ち明けることができた。長い間被災者に寄り添い続けたありのままの思いを聴く、そんな取材の姿勢が被災者の心を動かし、また視聴者にも思いを伝えたのだと思つた。被災者の気持ちを全てわがらうとするにはできないかもしれないが、それでも諦めずに寄り添い、わがらうとする姿勢が大切であると感した。被災者の思いを受け止めることに目を向けて、被災した人々と向き合い寄り添い続けよう。また、能登に活気が訪れるのを感じ

START!!

大成長のスキーの他にも、楽しいイベントがいっぱいの修学旅行！裏面では、我々新聞委員会が楽しんだスキー旅行を順番に紹介していきたいとします。あなたはどんな旅行がしたいですか？
(編集部共同取材)

上野駅に8時集合!



すこやかな一日を願う 「ヴァルトベルク」女将さんに取材

錦城生に「高校生活を楽しんでほしい」と語るのは、ヴァルトベルクの女将を務める岡崎恭子さん。食事の際には、「心穏やかに過ごせる1日となりますように」など、体調を気遣い、1日の幸せを願うメッセージカードがお箸の横に添えられていた。毎食、一人一人異なるメッセージカードはなんと、その大部分が岡崎さんの手作りによるものだった。ホテルに到着したとき真っ先に目に止まった「歓迎! 錦城高校」と書かれた大きなパネル。岡崎さんによると、錦城は、毎年修学旅行でヴァルトベルクを訪れる唯一の高校だという。この時期になると、ホテルで作ったこのパネルを外に設置しているのだそう。コロナのときは57、58回生の蔵王スキーは中止となった。岡崎さんは、「観光業は、世界が平和でないと成り立たない職業です。コロナになって、改めてそのことを実感しました」と当時を振り返る。しかし、その一方で「コロナになったからこそ、省いた方がいいことなど、効率を考えました。勉強になりました」と話す。また今回、岡崎さんは申田先生・郷野先生・阿部先生と共に震災学習の下見に同行したのだという。同じ東北でも、蔵王より深刻だった震災について、「まだ十数年しか経ってはいないのに、もうここまで復興しているのだ」という思いと、「まだここまでしか復古していないのだ」という思いが入り混じったそう。岡崎さんは震災について、「まだ見つかっていない方もいらっしゃいます。震災の大きさがこれからも続いていくと考えると、何をもち『復興』と言うのか考えさせられました」と語ってくれた。5日間錦城生を支えてくれた岡崎さん。「高校生活は一回しかありません。楽しんでものの勝ちです。必要なことや嫌なこともいっぱいありますが、必ず自分の経験が糧になります。高校生活を楽しんでほしいと思います」と応援してくれた。
(普)



「高校生活を楽しんでほしい」と岡崎さん

陶芸

A・B・E・H・K・L組は「七右衛門窯 陶芸教室」にて、陶芸体験を行った。制作する品は、①平たいお皿、②コップやお茶碗などの器、③置物の3種類の中から選ぶことができる。ほとんどの人にとって初めての体験。お皿を作った生徒では、スタンピングやシートを使って模様付けをする

5日目クラス別体験学習

人が多かったようだ。幾何学的な模様を一面に付した生徒も居れば、生い茂る葉で美しさを探求した生徒もいた。中には、作品に日付を入れて記念にする人も！



オリジナリティ溢れる作品を作る

コップやお茶碗を作った人の中には、使いやすいように自身の手にフィットする大きさを器を作ったり、厚さや深さを、口の広がりやオリジナリティを出す生徒も見られた。「実演も交えた先生の説明

を聞いて、限られた時間のなかでも、自分でも納得のいく作品ができたと思います」と感想を話すのは、森本奈々子さん(2A)。ろくろを使った陶芸体験は初めてだとい

(普)

が、友達とテーマを合わせて、今回はトカゲの置物を作った。細かい形にすると割れてしまうので、大きなパーツにデフォルメ化して作ることを意識したという。チャームポイントには笑っているように閉じた目。「特徴を捉えて形を作る必要がありすが、形を整えて創意工夫することが大変でした」と話す。色もつけて印象も変わらぬと思うので、完成が楽しみで笑顔を見せ、次回の実用性も兼ねた作品を創っていきたくて語った。
(英)

それぞれ最後に一つ好きなテーマで自由制作したり、道具を持ち帰ることができたりと、楽しい思い出もたくさんつくることができた。佐々木晶大さん(2C)は、「乾燥させることなく常に生地を濡らしながらつくるのが大変でした」と語ってくれた。自由制作については「限られた素材で考えながらつくるのが大変でしたが、良い経験になりました」と振り返った。
(英)

味噌づくりを体験した秋村菜那さん(2D)は、「手でこ



「丹精込めて作りました」

いことなど忘れていました」と話す。国産大豆を使用した味噌は日本に出回る味噌の1割程度と言われるほど希少ななか、今回は100%国産大豆を使用した。加えて、麹を大豆の量より多く贅沢に使う「22割こうじみそ」は、より甘味が強い味噌に出来る上がるそう。驚くことに、国産大豆や麹を贅沢に使った私たちが作った味噌は、お金にする約1万円に相当するとい

D)。「豆を足で踏みなど普段の料理ではない動きをしてとても楽しめました。普段食べるのとは違う22割麹味噌を作ったので美味しく作れているといいなと思います。お味噌汁にして食べたいです!」と味噌の完成を待ちわびる様子を見せた。他にも、「初めて作ったけど、けっこう踏みが大変で時間がかかった」「思ったより入れる塩が少なかった」などといった感想が見られた。修学旅行で作った味噌は、これから発酵させて来年度の8月に完成する。どのようにいたたくか、今

(普)



本格的な和菓子を作る

で菊の花を作った。梅の花は中心を決めて五等分に線を入れるが、太さを一定に保つのが難しく、全体のバランスも非常に取りづらい。形が取れたら中心に黄色い生地を丸めたものを乗せて完成した。菊の花はお好みで12〜16等分くらいにして、先端に球がついた棒状の道具で花びらをへこませ、黄色く塗って完成。形はきれいでなくても、美味しい和菓子をつくることのできた。

それ以外最後に一つ好きなテーマで自由制作したり、道具を持ち帰ることができたりと、楽しい思い出もたくさんつくることができた。佐々木晶大さん(2C)は、「乾燥させることなく常に生地を濡らしながらつくるのが大変でした」と語ってくれた。自由制作については「限られた素材で考えながらつくるのが大変でしたが、良い経験になりました」と振り返った。
(英)

疲れ身体を癒すお宿「樹林」

上の台ゲレンデのそばにあるホテル樹林。総客室数58室、スイート・エグゼクティブ・スーペリア・コンセプトルームから和室まで、多種多様な部屋が揃っている。錦城が利用したのは今回が初めてだそう。ラウンジには薪火を囲うように設置されたソファがあり、ゆったりとくつろげる。温泉は大浴場に加え、山形の歴史ある源泉の露天風呂も。さらにスキーヤーには嬉しい乾燥室が完備され、濡れたスキーブーツも翌日にはすっかり乾いた状態で履けるようになる。朝食、夕食では山形名物の蔵王牛や玉こんにやくをはじめとした絶品の数々で、満足感のある食事となった。樹林での日々はどれも素晴らしい思い出となった。
(英)



部屋で楽しい団らん!

仙台名物牛タンをパリッ!



「スキーをすることで、ほかに感じられない何かを」

修学旅行を支え続ける

ホテル松金屋アネックスのオーナーである齋藤龍太さんは、毎年錦城のスキー修学旅行を現地で統括している。今年も車の手配や食事会場の設定など、宿側の様々な仕事を手配してくださった。大人数を一度に動かすため、インストラクターさんと宿の人など蔵王の人みんなと協力していたというが、その中でも特に「先生たちの努力がすごいな」といつも思っています」と振り返ってくれた。「部活とかでもなくて、みんなで同じ楽しみや苦しみを味わう機会なんてそんなにない。みんなの将来に生きれば」と齋藤さん。男子校時代からこの修学旅行が続いていることに触れ、「スキーをすることで、他ではない何かを感じられるんじゃないかな」と頷きながら語ってくれた。
(瑞)

GOAL

修学旅行のスキー以外の魅力、楽しんでいただけたらどうか? 61回生は思い出を振り返るきっかけに、62回生はこれからの修学旅行を楽しみにしてほしい。
オマケ 蔵王でもらったシールの写真→
(蘭・仏)



和菓子作り

C・I組は和菓子作りを体験した。練り切りという白あんベースの生地に花や果実など表現する和菓子を制作した。まず、中に入れるあんこを球状に丸める。粘土のような感覚でこねていくが、手にあんこがつきやすくなり難しい工程だ。次に、あんこを包む外側の生地をこねる。カラフルな生地をこねて丸め、綺麗な円になるように平たくする。今回は赤の生地を梅の花を、ピンクと白を混ぜた生地